

エクステンジリングス

甘木数彦

プロローグ

—

圧倒的な質量を以て、おまえは美しい。そろそろおまえの庇護を受けた子供達が、目覚める時間だ。

明けなずむ真冬の闇に浮かび上がっているであろう都市の姿を想像し、女王は思う。それは彼女の創造主が遺した言葉だ。

彼女がその言葉を思い浮かべたのは子供、という単語のせいだった。子供の一人が、女王の中に重々しく居座っているのだ。彼女が自ら育てた人間の子供だ。

女王は果ての壁が空気に霞んで見えないほどの、広大な謁見室に腰掛けていた。その玉座は鑄鉄製で、一〇メートルほどもある背もたれには『アーサー王物語』や『真夏の夜の夢』をはじめ、様々な妖精物語に出てくる場面がレリーフとして刻まれている。

玉座の主である女王も堂々とした背丈をしており、ほっそりとした体を覆う白を基調とした衣装はたっぷりとしたひだ飾りや、艶やかな黒い宝石で彩られている。肌は頬の薄い赤みを除けば衣装に劣らぬ白さで、周囲を睥睨する切れ長の目と薄い唇には冷酷さと退屈さが宿っていた。

女王の前には廷臣たちが居並び、各自がバラバラに女王へ報告を行っている。その声も広大な空間にあっては、ささやかなノイズほどでしかなかった。

とはいえ、すべては女王の中にあるイメージでしかなかった。実際の女王たちは都市の地下深く、冷えきった空間に並んだ棺のごとき箱の中に偏在する、実体のない存在に過ぎない。

女王が考え事にふける合間も、廷臣たちの報告は続く。彼女は機械的に承認を与え続ける。裁量こそが女王の務めだからだ。実行は廷臣や、彼女の子供である人間が行なう。むしろ彼女の意見は最優先されるものの、そのようなことをする必要は滅多になかった。

報告の大半は異常なし、というものだった。あるいは回避された異常に関する事後報告。その中の一つが、彼女の注意を引く。子供が一人、行方不明になったという報告だ。彼女はその詳細を検討する。洗練された保護機構を侵すことなく、犯人は子供を寝室から連れ去ったのだという。すでに警察が行動を開始しているとのことだった。

あの子がやったのだ。彼女は確信する。都市に存在する無数の監視網と堅牢な警備体制を無効化し、誘拐ができる人物など他にはいない。彼女は自分の育てた我が子に、都市のあらゆる保護機構や監視をかいくぐるすべを伝授したのだから。いや、かいくぐる必要さえない。都市に存在する全ての鍵や警報装置は、彼を認識するなり無力化されるように設定されている。何年も前に彼女自身がそうするよう、命令したのだ。我が子の網膜パターン、指紋、声紋、遺伝情報を持った者に対して、都市はその存在を認知しないように、と。廷臣達は理由も問わず、女王の意見を反映させた。そしてすべてを終えた後、命令どおりそのことを完全に忘れた。だから、今でも女王が育てた人間の子供のことを知っている者は彼女しかいない。都市の管理者達ですら、その存在は知らなかった。もっとも、管理者は女王の存在も、自分達の管理している都市が実は彼女の王国であることも、知らない。

創造者がそうなるように望んだのであり、彼女は細心の注意を払ってその望みを守ってきたのだった。

情報を掌握し、いかにして彼女の子供である市民をいかに理解し慈しみ、都市に豊かな「余剰」をもたらすか。それが女王に課せられた義務だった。そのための取り組みの一つがいま、結果的に若い市民の命を奪い人々に恐怖と不安をもたらしている。女王はその事実を冷静に受け止める。

なにか、手を打つ必要がある。それも密やかに。他の子供達に知られてはならない。そんなことになれば、子供達に要らぬ恐怖を与えてしまうだろう。やはり処分するしかない。その決断に苦渋やためらいはなかった。女王としての義務を最大限に果たすための効率。そこに感情が挟まれることはなかった。

ほどなくして、解決策を求めていた女王は自らが育てたもう一人の我が子に思い至る。人間に対する自分の認識を試すため、最初に育て上げた子供だ。その子の存在は女王にとって満足のいくものだった。もっとも、人間の方の我が子が引き起こしつつある事態を考えるなら、それは勘違いの自己満足に過ぎなかったことになる。自分は人間というものを、正しく把握できていなかったらしい。とはいえ、他に動かせる手立てがない。

女王は残っていた我が子に呼びかけると、指示を出した。一瞬の狭間に幾度もの遣り取りが交わされ、子供はなすべきことを理解する。次に女王はその子供の肉体を調べた。長らく放置されていたせいで、幾つか不調な部分がある。目的に合わせて外見も変える必要があった。記憶の方も若干変えねばならないだろう。

女王は目的を悟られぬよう、必要な指示を細かく分散させて廷臣達へ命じた。命じられた廷臣は疑問を挟むこともなく、彼女の言葉を実行していく。自分達の職務遂行以外には徹底して無関心なのだ。他にも準備すべきことがある。彼女はそれらについて考えを巡らせていった。廷臣たちは途切れることのない報告を続けている。

二

目を開けても視界がぼやけていた。横たわったまま少年は手の甲で目をこする。埃が目元に筋となって残るが、少年は気にしない。ただ、手の甲を濡らしている液体をぼんやりと眺めている。涙だ。不意に気が付く。だが、これまで寝ているあいだに泣いていたことなどなかったせいで、少年はそれが本当に涙だと確信が持てなかった。そもそも、泣いたことなど記憶の中では数えるほどしかない。

少年は身を起こすと、寒くもないのに両膝を強く抱きかかえた。親しみやすそうな整った顔を、膝のあいだに押し当てる。暗い部屋は家具も何もない。ただ、外からの明りがうっすらと少年を浮かび上がらせていた。

緑色のジャージを身につけた少年は爪が伸び、髪は乱れ、口元にはひげの前段階である濃いうぶげが生えている。痩せこけてはいないが、全身から憔悴を漂わせているその姿は、均等に埃のつもった床から生えてきたようだった。

少年はそっとつぶやく。声変わりの途中であることが判る、ひずんだ声だ。とたんに目頭が熱くなり、少年は鼻を鳴らした。

その言葉は少年が仕事にとりかかる合図として、かつては同じ口から誇らしげに宣言されたものだった。同時に、それは少年にとってたった一人の友人である少女の呼び名でも

あった。物言わぬ彼女は常に少年と共にあり、少年の言葉に微笑みかけ、ときにはイタズラっぽい瞳で少年を挑発した。しかし今、彼女はどこにもいなかった。

もう何度目になるのか。少年は周囲を見回した。どこかに隠れていた少女が、なじみ深い照れ笑いを浮かべながら出てくることを期待して。これまでも冗談で隠れてみせることはあった。そんなときは少年が名前を呼びながら探し回れば、必ず最後には物陰から姿を見せたものだった。だが、彼女は現れない。そもそも、からっぽの部屋に身を潜めるような場所などない。

少年は力なく顔を上げると、部屋の反対側で横になっている少女を見遣った。ゆっくりと焦点が合う。全く動かない。死んでいるのだ。

「誰なんだよ」

少年のかすれた声が部屋を横切り、少女の体にそっと触れた。

第一章

久堀くほりとびはる鳶春は、名前が呼ばれるのを待っていた。忍耐力を総動員して。いつもその日の最後に予約を入れているから、待合室へは誰も入ってこない。

また一人、名前を呼ばれて診察室へと入っていく。残り三人。鳶春は妙にくすんで感じられる蛍光灯に照らされた、「七月七日はメカニカル・アイの日です」というポスターに陰気な視線を投げる。その隣には「握力調整がおかしいと感じたら」というポスターも見える。どちらのポスターも、かれこれ三年くらい前から貼られたままになっている。あまりにも繰り返し目にしてきたせいで、鳶春にとってそのフレーズは壁紙の模様も同然だった。

病院の待合室というのは精神的に陰鬱な場所だ。狭い椅子に座り、じっと順番を待つだけ。どこかで時間を潰したくとも、そうしている間に名前を呼ばれてしまったら、結局は待ち時間が増えてしまう。できることと言えば時間の経過へ鈍感になることくらいだった。

何をしているのか、呼ばれた人はなかなか出てこない。「待合室にいる全ての患者は、手のかかる処置が必要になる。ただし、自分以外」。鳶春は何年も前に考えついた法則を思い出して軽い溜息をつき、ソファへ座り直す。シートや背もたれが安っぽいビニール素材でできているせいで、壁に体重をあずけていると、いつのまにか前の方へ腰がずり出してしまうのだ。

工学外科にいるのは、ほとんどが年寄りだった。若い頃に人体の一部を機械化することが流行った時代の人間だ。他の科と違って患者の顔触れがあまり変わらないので、患者同士はたいていが顔見知りだった。

鳶春の隣に座っているのはテイさんと言って、七十歳くらいらしい。機眼の調子が悪いとかで、ときどきやって来る。眼のピントがぼやけたり、急にズームしたりな。危なくて歩けねえよ。酔うしな。テイさんは以前、自分の病状をそう説明していた。それなら生体眼に戻せばいいような気もするが、高機能な眼に慣れてしまうと、生身の眼など使ってもらえないということだった。それに肉体が老化しているせいで、たとえ生体眼に戻したくてももう手遅れなのだそうだ。まあ、白内障かなんかで病院に通うこと思や、たいして違わねえよ。そうも言っていた。今日は特に調子が悪いようで、じっと目をつぶっている。

「久堀鳶春さん、診察室にお入りください」

乾いて温かい空気で脳が干からびる頃、天井に据えられたスピーカーから早口で名前が呼ばれる。鳶春は診察室へ入った。

狭い診察室には小さな寝台と丸椅子が置いてある。バッグをかごへ置き、鳶春は椅子へ座る。

「はいえーとどう？」

担当医の江澤羊吉はケーブルを右手に持ったまま、尋ねる。あんまり何度も同じ言葉を繰り返すせいか、それはひとつの単語みたいだった。

「焦点を合わせるのが微妙に遅い感じが」

鳶春は服を脱ぎながら、なるべく羊吉の方を見ずに言う。羊吉の背後の壁に貼られている、古ぼけた絵を見ないようにするための。それは久堀鳶春によって描かれた、現存する最古

の絵。幼かった鳶春がクレヨンで描いた、羊吉の似顔絵なのだ。幼い頃、自分がどれだけ世界に対して無邪気だったのかをいつまでも見せつけられるのは、鳶春にとってなかなか辛いことだった。しかも、紙の余白がすっかり黄ばんだその絵は十年以上もそこにあって、毎日何人もの人に眺められている。

「ちょっと見せて」

羊吉は素早く大ざっぱなくせに、妙に正確な手つきで鳶春を後ろ向きにすると背骨に沿ったキャップを外し、右手のケーブルを端子に差し込む。それから正面を向かせ、鳶春の眼をのぞき込む。眼鏡越しに見える羊吉の大きな眼は灰色がかって充血していた。視界の端に、大きな頭へ手足をくっつけただけの絵が見える。周囲には蝶のような花のようなものが散りばめられている。平仮名で書かれた「えざわようきちせんせい」の文字が恥ずかしい。

羊吉は鳶春の眼と、机に置かれたディスプレイとを何度か見比べた。

「すこーし調節がずれてるから、治しとこう」

膝に乗せたキーボードに何かを入力しながら言う。画面の方は見ていない。手を伸ばして背中ケーブルを引き抜くと、手探りでキャップをはめる。

「はい、じゃあ表で待ってて」

手早く服を着ると鳶春はバッグを取り、部屋を出ようとした。

「そうそう、そろそろボディを取り替えるから、親御さんと相談しといてください。どーんとデカくなるよ」

「ああ、はい」

鳶春はドアを閉めた。

鳶春の体が脳と一部の神経系を残して全て機械に置き換えられたのは、生まれて間もなくのことだった。柔らかな息子の肉体を金属と人工皮膚に移し替えるか、永久に別れるか。両親は迷わなかった。もちろん、それを恨んだことはない。死ぬよりはマシだった。それに国の難病指定に当てはまるということで医療費は全額免除されており、貧乏生活もしないですんでいる。

肉体を機械化したとはいえ、老人達のように視覚や聴覚、腕力などが強化されているということはなかった。シンプルで、なるべく故障が少ないということを重視したのだ。そのため、調子が悪くなることは滅多にない。ときどき体を「成長」させるために入院する必要はあるものの、生身でかかる病気を心配するよりはずっと気が楽だった。

「処置室」が病院の一部であることを感じさせるのは、部屋の中央に置かれた医療用のベッドだけだった。それを除けば室内は修理工場か工学系の研究室を思わせる機器と工具類でいっぱいだった。工学外科の患者にする処置といえば機械修理しかないのだから、無理もない。消毒薬と焦げた金属のおいが辺りに漂っている。

「はい、お待たせ」

看護師の笹木勇蔵が入ってくる。ほっそりとした羊吉とは対照的に、勇蔵は堅太りして浅黒い肌をしている。二人とも同じ大学の工学部工学外科を卒業した同級生だという。それでも勇蔵と羊吉とは、ずいぶん年が離れて見えた。どちらが年上に見えるかは日によって違うのだが、少なくとも同年齢ということだけはありえないような気がした。

鳶春はベッドのへりに腰掛けると、シャツの背中をまくった。勇蔵は背中の中のキャップを外すと、そこへベッドから伸びているケーブルを接続した。

「先生、なんて？」

勇蔵は尋ねながらゴーグルを装着する。鳶春のしているものがゴーグル裏の画面に映っているのだ。

「あちこち眺めて。そうそう」

勇蔵はしばらくしてゴーグルを額へ押し上げた。

「で、なんて？」

「今度はドーンと成長するって」

勇蔵はトレイの上から小さい目盛りが並んだりモコンを手にする。

「そうか。はいはいはい、と。じゃ、たぶんそれでしばらくは終わりだな。次は、うん。

オッサンの入り口くらいか、な、と」

再びゴーグルをかけ直した勇蔵はレバーをあれこれといじる。鳶春の視界は急にぼやけたり、鮮明になったりを繰り返す。壁に取り付けられた鏡が目に入る。自分の顔が見えた、と思うとまた光景がにじんでしまう。

鳶春の顔は生身だった赤ん坊の顔から、加齢をシュミレートしてデザインされている。それが生身だった場合の顔をどれだけ再現できているのかは知りようもないが、人間につきものの汗や脂によるテカリや、同級生達が深刻に悩んでいるニキビなどは全くない。人工皮膚なのだから当然だが、鳶春は却ってその清潔感が嫌だったこともある。しかし次の次でいきなり中年の兆候が感じられる体、というのは嬉しくなかった。

「中間ってないんですか？」

「中間？ 普通はないな。今度の手術があるだろ？ その次は二五くらいだ」

「二五歳？」

鳶春は聞き返す。勇蔵の言葉から、三〇歳前後の肉体に押し込められるのではないかと想像していたのだ。

「二五歳くらいになるだろ。すると、あるとき自分の体にほんの、本当にかすかに、だけど気配を発見するんだな、これが。ああ、確かにこの先、自分もオッサンになるんだってな。もちろん、二五だってまだまだ若い。けど、それまでは頭でだけ理解されてたことが実感に変わるんだよ。生きてればそのうち中年になるってことが」

「だけど、せっかくの機体なんだし、若いままでいたって……」

「考えてもみるよ。恥ずかしいぞ、四〇代五〇代になって、二〇歳そこそこの外見するのは。必死で若さにしがみついているみたいだろ。それか、中年になっても思春期ぶってるみたい。結局、肉体的な若さなんてほどほどに手放してった方がいいんだよ」

言われてみればそんな気もする。しかし勇蔵にしたところで実際にそんな人を知ってるわけではないのだから、本当のところは判らない。

会話する間にも視界は鮮明になったりぼやけたりを繰り返し、さらに眼球をあちこちに向けさせられもした。いつのまにか、鳶春自身からの操作は受け付けなくなっている。普通なら目が回って気持ち悪くなるのだろうが、機械の体に「酔う」ことはない。鳶春は目を閉じてみた。急に画面がブラックアウトしたのに驚いて、勇蔵が声をあげる。鳶春は目を開いた。

「いたずらすんな」

勇蔵は言うと、わざと激しく鳶春の眼を動かした。右に左に処置室が流れる。

病院を出るとすっかり灯が暮れていた。代わって道の両脇に並んだ街灯の白っぽい輝きが、辺りを照らしている。鳶春の住む常若市とこわかしはそれ自体が巨大な建造物なのだ。昼には自然光を模した天井灯が灯り、日が暮れば街灯がそれに取って代わる。

通っている病院は五階のはずれにあるせいで、人通りが少ない。歩道の石畳を靴底が打つバタリ、バタリという音が他の足音に混ざって妙に大きく聞こえる。鳶春は機体を歩かせるのがあまり得意ではなかった。どうすれば上手い足の運びになるのかが判らない。それでも羊吉が言うには、後天的に全身を機体へ移した場合に比べて他に身体感覚を知らないぶん、遙かにスムーズに機体を操っている、らしい。天才的だと言われたこともある。

確かに、歩き方を除けば鳶春はの仕草は平凡な高校生だったし、そうすることに特別な努力をしているわけではなかった。けれど、非凡な才能によって平凡なことが達成できているのだと思えば、たいして誇らしい気分にはなれない。

歩いているとやがて直線的な通りが途切れ、小さな円形広場に出る。中央の円形花壇には何も植えられておらず、立ち枯れた雑草がまばらに残っているだけだった。

広場では数本の通りが合流している。普通、駅へ向かうには来た道と右に直交する太い通りを進む。けれども鳶春は斜め右手前にある、ひととき狭い道へと入っていった。知らない人間が見ればなんのために造られたのか判らないような小道で、すぐに行き止まりになりそうな雰囲気がある。地図にも載っていない。けれどもそれが、何年も通院する間に鳶春が発掘した最短ルートだった。

市内にはこうした抜け道が他にいくつもあった。それらは、隣接する建物同士の狭間という扱いになっている。鳶春が知っているのはその一部だった。地図に載っていない道を探すのが趣味なのだ。他の子供と一緒に走り回ったりできないぶん一人で過ごすことが多く、かといって家へ帰る気にもなれない。そんな時間の積み重ねがいつしか鳶春を狭間道の散策へと向かわせたのだった。

実際、よくよく注意するとそうした場所は多かった。そんな道からしか行けない、見捨てられた広場だってある。市内を常に巡回しているロボットたちはそうした場所の映像も蓄えているのだろうが、一般人がそれを目にする機会はまずない。

レンガ壁に挟まれた道を鳶春は進む。窓や街灯は一つもないが、そのぶんこうした道では天井灯が常にやわらかく灯っている。鳶春の少し前屈みになった影が道に落ちている。両腕が重いせいでそんな姿勢になってしまうのだった。

他人からは「とぼとぼ」としか言いようのない感じで歩いていると、やがて道が二股になったところへ着く。片方は駅へ向かう道だった。そしてもう片方は、これ以上ないくらいに道幅が狭い。小柄な鳶春が横向きでどうにか進めるくらいだった。だから道ではなく、それこそ隙間と呼んだ方が正しい。天井灯もないので、数十センチ先はもう闇に消えている。そこがどこへ通じているのか、鳶春は知らなかった。いつも放課後の病院帰りにしか通らないこともあって、これまで探索をせずに来たのだ。けれど、今日は違う。「デカくなるよ」という羊吉の言葉が浮かぶ。そうなればもう、この道は通れない。どうせ今日は眼の調整で遅くなったのだし、それを予想して親にも遅くなるかもしれないと告げてある。

腕時計を見ると、もうすぐ七時になるところだった。鳶春はバッグを胸元へ抱きかかえると、隙間へ足を踏み入れた。

背中で壁をこすりながら奥へと進んでいく。服は汚れるだろうが、どこかを擦りむくよりはいい。生身と違って、傷が自然に治癒するようなことはないのだ。

時々、靴の先も当たる。表通りからの音もここまでは届かない。そのせいで鳶春の息遣いは戸惑うほど間近に響く。まるで誰かの吐息を耳元を感じているかのようだ。

暗がりには予想よりも長かった。どこまで行っても終わらない。もう一ブロック分は進んだはずなのに、行き止まることさえない。

はっきりとは判らないが、どうやら道は途中から緩やかなカーブに沿って歩いているようだった。そうでなければ、そろそろどこかに出てもいい頃だ。ただ、一方の建物の端が弧を描いているのはいいとしても、もう一方がそれに沿うような造りになっているというのはおかしい。そんなことを考えながら、鳶春は深く深く入り込んでいく。

日頃の生活圏から離れていくと共に家族や学校での人間関係が、手間のかかる体のことが、意識から薄らいでいく。鳶春はだんだん自分が名前すらない、誰でもない存在へ変わっていくような気がした。一方で、自分が確かにそこへ存在しているのだという実感は強まっていく。地図にない道を歩いていると、いつもそんな気分になった。別に他人と比べて、自分が日常へ特別な不満を持っているとは感じていなかったが、それでもそれは心地よい気分だった。そもそも、こうした道の探索を趣味としているのは鳶春だけではなかった。ネットで検索すれば、似たような趣味を持っている人間は僅かながら居た。しかし、探索の結果を地図として発表している人はいない。これから進む道の先がどうなっているのか知ってしまえば、その魅力は損なわれてしまう。同じ趣味を持つ者は誰もが同じ点に魅力を感じているらしく、地図に載っていない道に関する描写や写真を公開しないことは、半ば当然のルールと化していた。そうした情報を得てしまえば、たとえ初めて訪れる道であっても、そこはもう既知の空間に過ぎない。

知らぬ間に気が急いでいたのか、手の甲が壁にぶつかる回数が増えている。鳶春は立ち止まると、ゆっくりと呼吸をする。脳以外は酸素を必要としないせいで、つつい何か集中すると呼吸がおろそかになってしまう。体の動きが少ないときはなおさらだ。小さい頃はそのせいで脳が酸欠を起し、鳶春はよく気絶した。

十分に落ち着いてから、前進を再開する。それでも手の甲が壁に当たる回数は減らない。しかも背中に当たる壁の感じが変化している。体が伝える乏しい情報から、一つのイメージが生まれる。道が左回りの螺旋になっていて、カーブが徐々にきつくなっているというイメージだ。そんなはずはない。隣り合う二つの建物の間がそんな袋小路になるなんて。否定してみても、その思いつきは現実味を増していく。左右の肩が壁に押さえられて、背中をまっすぐに伸ばせなくなってきたのだ。そのくせ、体を倒すと額が反対側に当たってしまう。このまま行けば身動きが取れなくなるんじゃないか。鳶春の頭へ不意に、そんな考えが浮かぶ。それでも引き返したくはなかった。今やかつてないほど、日常から遠ざかっている感覚がある。それだけで充分だった。かなり無理な体勢ながらも、鳶春はより奥へと歩き始める。

やがて、腕を胸の前で組んでおくのが難しくなってきた。鳶春は慎重に両腕を左右へ伸ばす。バッグが右手の先で揺れる。そうしてみると、腕は大きな曲面を抱きかかえるよう

な形になった。道が直線でなかったことを鳶春は確信する。体を半歩前へ出し、次に頭をゆっくり動かすという方法で、さらに移動していく。生身の体なら、無理な姿勢に体のあちこちが痛みを感じているはずだった。

どれくらいそうしていただけるか。無心になっていた鳶春は、遠くに白いスリットが見えていることに気付いた。出口だ。明暗の差が強いせいで明るい部分がハレーションを起こし、一本の線として眼に捉えられているのだろう。その証拠に、線は輪郭がぼやけて周囲の闇と混ざり合っている。

それにしても、どこかで一度道が交差でもしていたのだろうか。歩いている場所も最初のような直線に戻っている。脳内の描く地図が整然とした螺旋から、どことなく辻褄の合わない曖昧なものに変わってしまう。

白かった線が急速に大きさを増していく。その向こうで確かに空間の広がっていることが感じられた。

通路を抜けたとき、鳶春は街の外、屋外に出てしまったのかと思った。目の前に広々とした草原が広がっていたのだ。足元の草の柔らかな弾力が靴底を通して感じられる。頭上には宵の空が星を滲ませている。地平線の方では夕映えの残照が、赤みがかった橙色で空を縁取っている。

しかし、よく見ればそこはやはり屋内だった。床の草は本物だが、途中からは壁に投影された映像だ。空の方も、真っ白い天井へどこから映し出されているものだった。そもそも本当に屋外であれば、日が没して完全な夜空になっていなければおかしかった。それに鳶春が抜けてきた道のちょうど反対側には、同じような道へと通じる暗い入り口がある。それはちょうど、空間に生まれた黒い裂傷のように見えた。

右手の壁際には大きなロッジ型のテントが張られていた。正面の入り口が開け放たれており、簡素な内側が見えていた。テントの隣の壁は頑丈そうな扉になっている。

鳶春は何気なくテントから視線を移動させた。と、視界の隅で何かが動いたように感じられた。慌ててそちらを向く。すると反対側の壁にある、黒々とした道の奥。光が届く限界よりも一歩分外側で、もう一度何か動いたような気がした。

「おい」

鳶春は無人の空間で声を出す恥ずかしさと、監視されていたのではないかという不安をできるだけ押し殺して呼びかけた。

「おーい。誰かいますか？」

待ってみても返事はない。それが却って緊張感を高め、背後に口を開けている長くて狭い通路にまで、痒いような恐怖感を覚えてしまう。鳶春は暗闇に目を据えたまま、無意識のうちにテントのある側へ移動する。

「おーい。誰かあ！」

思い切って大声を出してみる。しかし、反応はない。しばらくのあいだ鳶春は道の奥にわだかまっている闇へ目をこらしたが、やはり動くものはない。諦めた鳶春は意識の一部をそちらへ残したまま、テントへ歩き寄った。

近づいてみると、麻色をしたテントは設置されてからずいぶんと時間が経っているようで、表面が緩やかにたるみきっている。大きく開かれた入り口から中を覗くと、使い込まれた寝袋とわずかな食器類、小さな衣装ケース、それに木製の道具箱が幾つかあるだけだ

った。

テント脇の扉の傍らに小さなくぼみが二つ、距離を置いて縦に並んでいる。下のくぼみは横長で大きく、上のくぼみは小さな丸い穴になっている。下の方は手を入れて指紋を読みとらせるようになっており、上の方は奥にはめ込まれたレンズで光彩を読みとらせるようになっている。それが扉の鍵なのだ。

とりあえず鳶春は扉の縁にある取っ手を引いてみた。裏側から溶接されているのではないかと疑うくらい、全く動かない。押してみても同じだ。何度か試してみて、手を離す。

そもそもここはどこなのか。鳶春はやっとそのことに思い至る。自分が立っているにもかかわらず、相変わらず目の前の壁には緑の草原がどこからか投影されている。再現された環境のみごとさから考えるに、相当の資金と手間がつぎ込まれていることは確かだ。普通に考えれば扉の向こう側を利用している人物と関係しているのだろうが、それが誰、あるいはどんな集団なのかが判らない。現在地を確認しようと、鳶春はバッグの前ポケットから携帯を取り出す。しかし、画面には「圏外」の文字が。初めて見る表示だ。壊してしまったのだろうか。困惑しながら画面を見つめていた鳶春はふと、電波の届かない場所にいるとそう表示されることを思い出した。試しに地図を呼び出そうとしてみたが、どこにもつながらない。しかたがないので携帯を再びポケットへしまう。

鳶春は壁に背を向けると、広々とした空間を眺め渡した。遠くの空を何かが二羽、舞っている。それは近付いたり離れたりを繰り返しながら少しずつ遠ざかり、やがて宵空と混ざり合い消えてしまった。地上に目を転じれば、遠くの方に白っぽいすじが伸びている。小川か小道か。歩いて行って確かめることはできない。ところどころに、生い茂った背の高い草が密集して藪になっている。映像の部分はどこも、架空の風に吹かれて柔らかく揺れている。鳶春はもう一度ポケットから携帯を取り出すと、風景を撮影してた。それは鳶春にとっては流儀に反するとも言える行動だったが、その場所の特異性は数々の狭間道を通り過ぎてきた鳶春にとって、写真という方法で保存でもしないことには確かに存在するという自信が持てなくなるほどだったのだ。

撮影した写真はサーバへ送られる。しかし、どうしても通信エラーと表示されてうまくいかなかった。考えてみれば圏外なのだから当然だ。

諦めて時計を見ると、時刻はもう九時を過ぎている。鳶春は少し迷ってから、自分が出てきたのとは別の道から帰ることに決め、再び長くて暗い通路へと入っていった。